

IV 調査結果の分析

性的マイノリティをめぐる制度や取り組みに関する大学生の意識

近畿大学人権問題研究所 教授 熊本 理抄

I. はじめに

2023年6月、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律（LGBT理解増進法）」が施行された。超党派の合意案、与党ならびに野党による修正案に関する短時間の協議を経て、当事者団体からの異議申立てを受けるなかで同法は成立した。法案をめぐる2021年の協議中にも政治家による差別発言がつついた。結果的に、当事者が長年求めてきた差別禁止規定は盛り込まれなかった。

超党派の合意案で「差別は許されない」と謳っていた基本理念は、「不当な差別はあってはならない」に修正された。また法の基本理念を実現するためには欠かせない実態調査等について、当初の文言である「調査研究」は「学術研究」へと修正される。さらに措置の実施にあたっての留意事項として、次の条項が追加された。「性的指向又はジェンダーアイデンティティにかかわらず、全ての国民が安心して生活することができることとなるよう、留意するものとする。この場合において、政府は、その運用に必要な指針を策定するものとする。」

教育分野では2015年に、文部科学省が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」と題する通知を発出。婚姻については2019年に、「結婚の自由をすべての人に」訴訟が、札幌、東京、名古屋、大阪、福岡で始まる¹。同性どうしの結婚を認めない現行法制度に対し、違憲判断も出されている。労働分野においては、2020年から大企業に、中小企業には2022年から労働施策総合推進法（改正パワハラ防止法）が適用される。厚生労働省が出した指針が定義するところのパワハラスメントには、「相手の性的指向・性自認に関する侮辱的な言動を行うこと」（SOGIハラ）、「労働者の性的指向・性自認等について、当該労働者の了解を得ずに他の労働者に暴露すること」（アウトティング）が盛り込まれる。さらに2023年には、性同一性障害者の性別の取扱の特例に関する法律が規定する生殖機能をなくす手術要件について、10月に最高裁判所が違憲の判断を示す。教育、婚姻、労働、司法、医療といった分野において、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みが、近年、当事者や支援者による運動の成果として大きな前進をみせている。

こうした動きのなかでLGBT理解増進法が成立に至った背景には、2021年の東京オリンピック・パラリンピックや2023年のG7広島サミット（主要国首脳会議）といった国際的なイベントに向けた外交アピールがある。加えて、2018年に杉田水脈議員が「LGBTは生産性がない」と寄稿して以降相次いだ、政治家の差別発言に対する抗議運動の後押しがあった。2015年には、市民レベルでLGBT法連合会が、政治レベルで超党派のLGBT議員連盟がそれぞれ発足している。差別禁止法を求めるLGBT法連合会²に対し、2016年、LGBT理解増進会³が設立され、「差別禁

¹ 「公益社団法人 Marriage For All Japan – 結婚の自由をすべての人に」のウェブサイト参照。

<https://www.marriageforall.jp/plan/lawsuit/>

² LGBT法連合会のウェブサイト参照。 <https://lgbtetc.jp/>

³ 一般社団法人 LGBT理解増進会のウェブサイト参照。 <https://lgbtrikai.net/>

止」あるいは「理解増進」を打ち出した政策提言活動が展開されることとなった。

さらに、渋谷区と世田谷区が2015年にパートナーシップ制度を始めたのを皮切りに、全国各地で同様の動きが進む。2018年には東京都で人権尊重条例（「東京都オリンピック憲章にうたわれる人権尊重の理念の実現を目指す条例」）が成立し、性自認および性的指向を理由とする不当な差別的取扱いが禁止された。そして2020年には、2015年に起きた一橋大学アウトティング事件に対し、アウトティングを「人格権ないしプライバシー権などを著しく侵害する許されない行為」とする東京高裁の判決が出される。

これら前進面に対抗するかたちで、同性婚やパートナーシップ制度への反対、性的マイノリティに対するバッシング、公共施設におけるトランスジェンダー排除といった反動がいつそう強まっていく。2021年には「女性スペースを守る会」⁴が設立される。性自認や性的指向を理由とした差別的取扱いの禁止を明記するとともに、LGBTQの家族に対する法整備等を求めるとした埼玉県「性の多様性を尊重した社会づくり条例案」が2022年に可決する際には、分断や対立を招くとして組織的なかたちで反対の動きが起きた。

同性婚を合衆国憲法下の権利と認める判決を連邦最高裁判所が2015年に出した米国に視点を転じれば、教育分野のバックラッシュ——図書館における発禁運動から、学校での教育実践反対、さらに高等教育への政治介入までを含む——が勢いを増している⁵。米国ではここ数年、LGBTQの権利を攻撃する法案、とくにトランスジェンダーの若者を攻撃する法案が各州から提出されている。LGBTQの権利を攻撃する510件(2023年12月21日時点)の法制度について、American Civil Liberties Union (ACLU) が追跡し、マッピングを公開しているが、その数と範囲は拡大傾向にある⁶。

米国全州を席卷する反動の直接的なきっかけは、トランプ大統領が退任直前の2020年9月22日付で発布した大統領令13950号「人種と性のステレオタイプ化との闘い」(Executive Order 13950: Combating Race and Sex Stereotyping)にある。人種や性に基づく抑圧を教えることは、マジョリティ側に不快感、罪悪感、苦悩、その他の心理的苦痛を与える、能力主義や勤勉倫理といった米国社会の重要な価値観や制度を根底から脅かす、そして社会に分断や対立を招くとして、連邦政府機関等での関連研修の禁止、事業受託者等への資金提供の停止といった措置を命じた。バイデン大統領が就任初日に同大統領令を撤回したものの、全米において同種の、あるいは対象や内容を拡大した法政策が、州レベル、郡レベルで広がりつつけている⁷。

⁴ 女性スペースを守る会のウェブサイト参照。 <https://womens-space.jp/>

⁵ 熊本理抄「人種的正義をめざす教育と研究への反動、反人種主義教育とブラック・スタディーズを守り抜く抵抗運動」『人権問題研究所紀要』第38号、2024年。

⁶ ACLUのウェブサイト参照。 <https://www.aclu.org/legislative-attacks-on-lgbtq-rights>

⁷ 2022年にフロリダ州で可決された通称「ゲイと言ってはいけない法 (Don't Say Gay Act)」は、性的指向や性自認に関する教育や議論を学校において大きく禁止、制限するものである。米国フロリダ州のデサンティス知事が、2023年5月、2024年大統領選に向けた共和党候補指名争いへの立候補を正式に表明する直前、観衆の歓声と拍手に迎えられて、4つの反LGBTQ+法案に署名した。出馬表明に向けたアピールだと言われている。対象年齢を拡大したいいわゆる「Don't Say Gay or Trans」拡大法案、広範な影響を与えるジェンダー・アファーマーリング・ケア禁止法案、文化検閲を可能にする反ドラッグ法案、そして学校や公共施設等のトイレと更衣室の使用を制限する法案の4つである。知事が署名した5月17日は、反ホモフォビア・トランスフォビア・バイフォビア国際デーだった。5月15日には、フロリダ州の公立大学における Diversity, Equity, and Inclusion (DEI) プログラムを実質的に禁止する法案に署名している。同様の動きはフロリダ州以外でも広がりを見せる(熊本理抄「存在の可視化と権利要求の闘い、激しさを増すバックラッシュ」『GLOBE』No. 114、2023年)。

LGBTQ + 若者の経験実態について、Gay, Lesbian & Straight Education Network (GLSEN) は 1999 年以来隔年で全米規模の調査をしている⁸。LGBTQ + 生徒・学生の生活が相当に改善されていることを示してきた過去 20 年間の調査と異なり、近年は停滞傾向にあると指摘する。学校環境に変化がみられる要因とその影響として GLSEN が言及するのは、反 LGBTQ + 政策と COVID-19 パンデミックである。

マイノリティ当事者や支援者の闘いにより人権にかかわる法制度や取り組みが前進すれば、それらへのバックラッシュが顕在化する。こうした歴史が繰り返されてきた。そのような反動は教育現場に大きな影響を与える。したがって、人権にかかわる法制度や取り組みを前進させるとともに、反動に抗する主体を形成するような教育実践を展開することは非常に重要である。こうした問題意識から本稿では、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みについて、近畿大学の学生がどのような意識を有しているかを把握することを目的とする。

Ⅱ． 制度や取り組みに関する意識

1. 制度、規範、慣習、取り組みについて

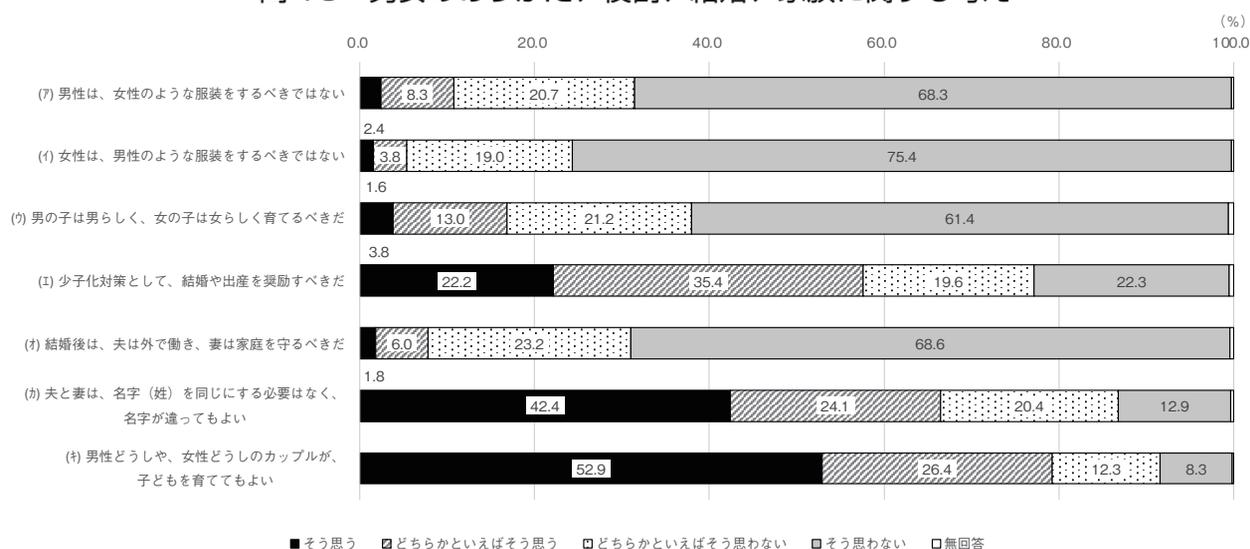
本調査では、性的マイノリティをめぐる法制度、規範、慣習、取り組みに関する考えを、問 10、問 12、問 13 で尋ねている。まず問 10 では、性表現、少子化対策、性役割、夫婦別姓、同性カップルの子育てに関する考えを 7 項目あげ、それら考えに対し賛成するかどうかを 4 件法で尋ねている（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」から 1 つ選択）。

結婚後の性役割（「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」）に賛成する回答（7.8%）より、性規範に従った子育て（「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべき」）に賛成する回答（16.8%）が 9 ポイント高い。性規範に従った性役割については、夫婦の性役割より子育てのありかたに対し賛成する傾向にある。「男性は、女性のような服装をするべきではない」という考えへの賛成回答（10.7%）が、「女性は、男性のような服装をするべきではない」という考えへの賛成回答（5.3%）の 2 倍であることから、性規範に従った性表現については女性に対する強要のほうが緩やかだと言える。

本稿での関心に照らし、問 10 の回答結果から 2 点に注目したい。1 点は、「少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ」という考えに対する回答が賛否二分していることである（賛成 57.6%、不賛成 41.9%）。2 点は、「男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい」という考えに賛成する回答（79.3%）のほうが、「夫と妻は、名字（姓）を同じにする必要はなく、名字が違ってよい」という考えに賛成する回答（66.4%）より約 13 ポイント高いことである。

⁸ GLSEN のウェブサイト参照。 <https://www.glsen.org/research/2021-national-school-climate-survey>

問 10 男女のありかた、役割、結婚、家族に関する考え



	賛成(%)	不賛成(%)
(ア) 男性は、女性のような服装をするべきではない	10.7	89.0
(イ) 女性は、男性のような服装をするべきではない	5.3	94.4
(ウ) 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべきだ	16.8	82.6
(エ) 少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ	57.6	41.9
(オ) 結婚後は、夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ	7.8	91.8
(カ) 夫と妻は、名字(姓)を同じにする必要はなく、名字が違ってよい	66.4	33.3
(キ) 男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい	79.3	20.6

※「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした

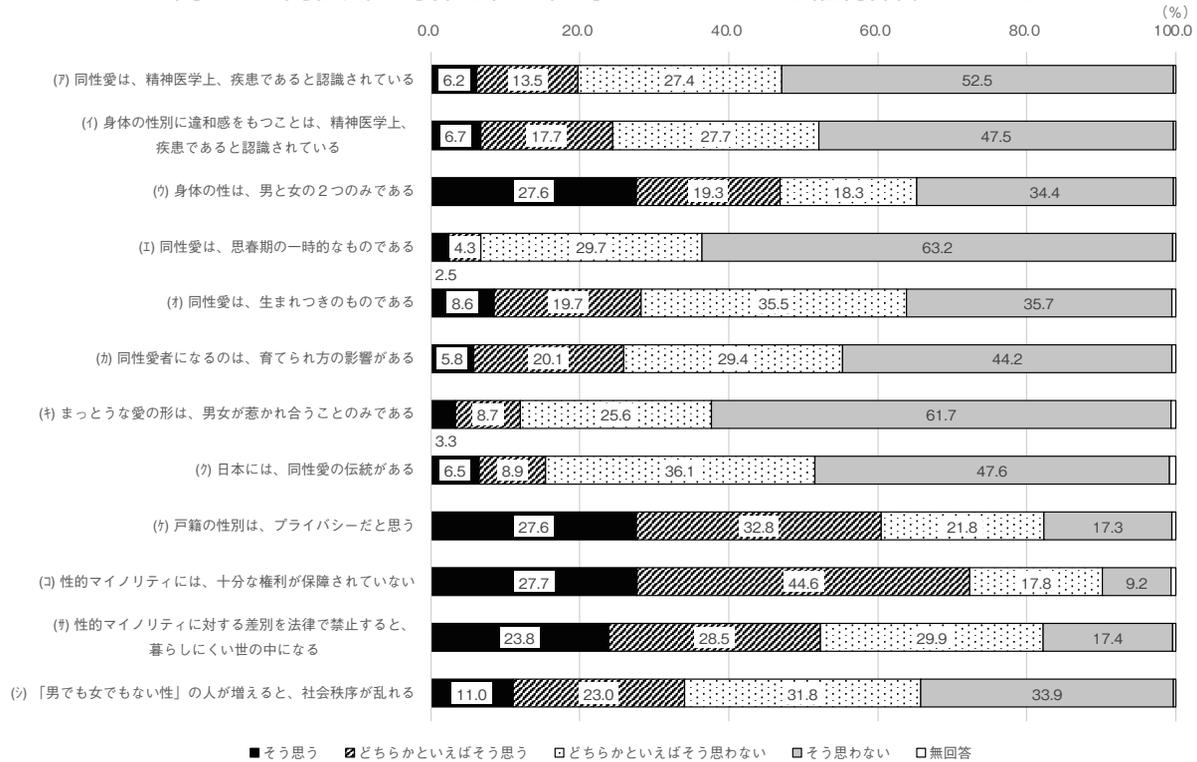
2. 同性愛や身体の性について、性的マイノリティの権利保障について

次に問 12 では、同性愛や身体の性に関する考えを問う項目とともに、戸籍、性的マイノリティの権利保障、差別禁止法、社会秩序に関する考えを示し、それら考えに対し賛成するかどうかを 4 件法で尋ねている（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」から 1 つ選択）。

同性愛についての考えをみると、「思春期の一時的なものである」に賛成する回答が 6.7%、「生まれつきのものである」に賛成する回答が 28.3%、「育てられ方の影響がある」に賛成する回答が 25.9%である。「日本には、同性愛の伝統がある」に賛成回答した者は 15.5%、「まっとうな愛の形は、男女が惹かれ合うことのみである」に賛成回答した者は 12.0%である。さらに「精神医学上、疾患であると認識されている」かどうかを尋ねる設問では、同性愛については 19.7%の回答者が、身体の性別に違和感をもつことについては 24.4%の回答者がそれぞれ賛同している。

本稿での関心に照らし、問 12 の回答結果からは以下の 3 点に注目したい。1 点は、「身体の性は、男と女の 2 つのみである」という考えに対する賛否が二分していることである（賛成 46.9%、不賛成 52.7%）。2 点は、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考えに 34.0%が賛成していることである。3 点は、「性的マイノリティには、十分な権利が保障されていない」という考えに 72.4%が賛成する一方、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考えに対して賛否が二分していることである（賛成 52.3%、不賛成 47.3%）。

問 12 同性愛、身体の性、性的マイノリティの権利保障について



	賛成(%)	不賛成(%)
(ア) 同性愛は、精神医学上、疾患であると認識されている	19.7	79.9
(イ) 身体の性別に違和感をもつことは、精神医学上、疾患であると認識されている	24.4	75.2
(ウ) 身体の性は、男と女の2つのみである	46.9	52.7
(エ) 同性愛は、思春期の一時的なものである	6.7	92.9
(オ) 同性愛は、生まれつきのものである	28.3	71.2
(カ) 同性愛者になるのは、育てられ方の影響がある	25.9	73.6
(キ) まっとうな愛の形は、男女が惹かれ合うことのみである	12.0	87.4
(ク) 日本には、同性愛の伝統がある	15.5	83.7
(ケ) 戸籍の性別は、プライバシーだと思う	60.5	39.1
(コ) 性的マイノリティには、十分な権利が保障されていない	72.4	27.0
(サ) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる	52.3	47.3
(シ) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる	34.0	65.7

※「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした

問 12 で賛否を尋ねた 12 項目の相関をみるために、各項目の回答について「そう思う」から「そう思わない」の 4 件法を 4 点から 1 点として得点化した。無回答は除外している。注目したいのは、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」について、ほぼすべての項目に 0.2 を越える有意な相関はない一方、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」については、複数の項目に 0.3 を越える有意な相関があることである。とくに社会秩序に関する項目については、「身体の性は、男と女の 2 つのみである」に 0.4 を越える有意な相関が、「まっとうな愛の形は、男女が惹かれ合うことのみである」にも 0.4 を越える有意な相関がある。

(7) 同性愛は、精神医学上、疾患であると認識されている	(4) 身体の性別に違和感をもつことは、精神医学上、疾患であると認識されている	(9) 身体の性は、男と女の2つのみである	(2) 同性愛は、思春期の一時的なものである	(4) 同性愛は、生まれつきのものである	(4) 同性愛者になるのは、育てられ方の影響がある	(4) まっとうな愛の形は、男女が惹かれ合うことのみである	(9) 日本には、同性愛の伝統がある	(9) 戸籍の性別は、プライバシーだと思う	(2) 性的マイノリティには、十分な権利が保障されていない	(9) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる	(9) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる
	.848**										
(4) 身体の性別に違和感をもつことは、精神医学上、疾患であると認識されている	.341**	.342**									
(9) 身体の性は、男と女の2つのみである	.375**	.339**	.288**								
(2) 同性愛は、思春期の一時的なものである	.269**	.250**	.130**	.228**							
(4) 同性愛は、生まれつきのものである	.315**	.309**	.281**	.363**	.146**						
(4) 同性愛者になるのは、育てられ方の影響がある	.402**	.376**	.344**	.488**	.219**	.378**					
(4) まっとうな愛の形は、男女が惹かれ合うことのみである	.159**	.196**	.076**	.233**	.145**	.184**	.126**				
(9) 日本には、同性愛の伝統がある	-0.030	-0.041	-.094**	0.016	.113**	0.039	-0.010	.119**			
(9) 戸籍の性別は、プライバシーだと思う	-0.041	-0.036	-.102**	-.049*	.106**	-0.009	-.073**	-0.001	.376**		
(2) 性的マイノリティには、十分な権利が保障されていない	.105**	.107**	.105**	.139**	.081**	.203**	.121**	.102**	.104**	.190**	
(9) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる	.347**	.342**	.445**	.325**	.127**	.348**	.421**	.100**	-.052*	-.067**	.249**

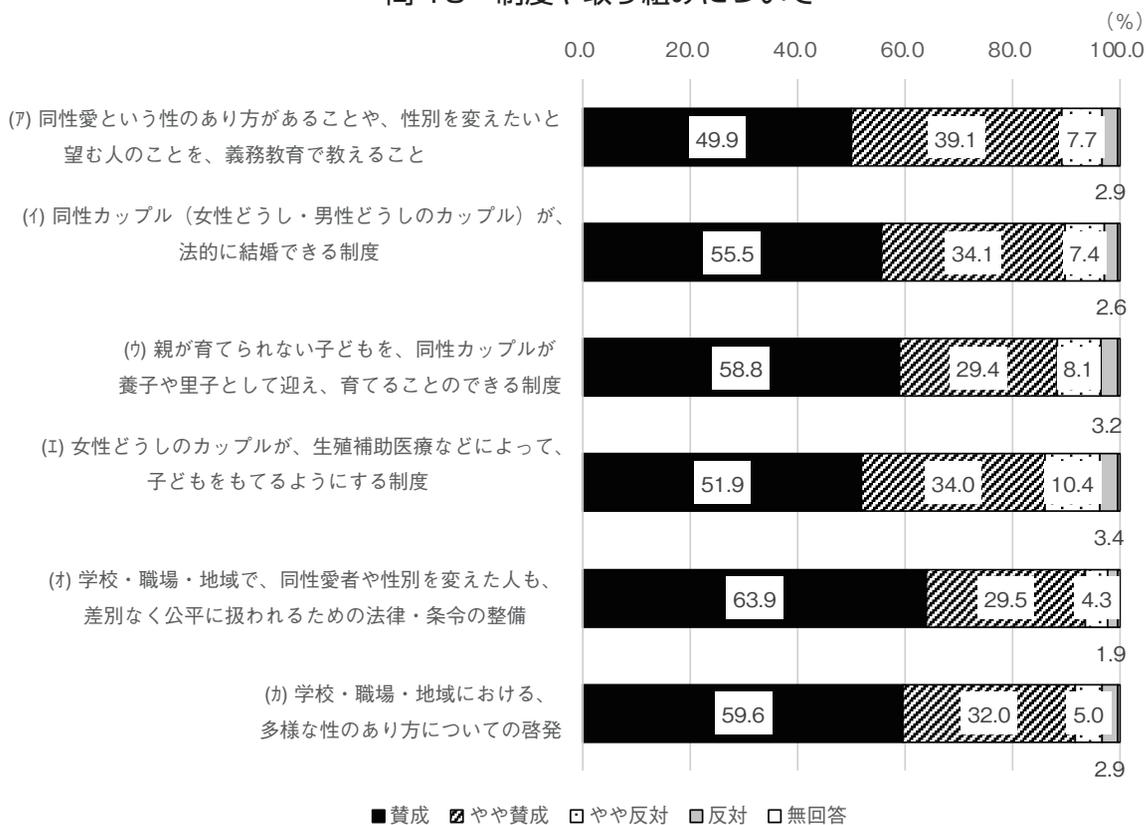
**p<0.01 *p<0.05

3. 制度や取り組みについて

さらに問13では、同性愛者や性別を変えた人について、あるいは多様な性のありかたについて、関連する制度や取り組みを示し、それら制度や取り組みに賛成するかどうかを4件法で尋ねている（「賛成」「やや賛成」「やや反対」「反対」から1つ選択）。

すべての項目において賛成回答が85%を越える。最も賛成回答が多いのは、「学校・職場・地域で、同性愛者や性別を変えた人も、差別なく公平に扱われるための法律・条令の整備」（93.4%）である。上述したように、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考えに対する回答は賛否二分している（賛成52.3%、反対47.3%）。一方、性的マイノリティが差別なく公平に扱われるための法律・条令を整備することには9割以上が賛成している。表は省略するが、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考えに「そう思う」と回答した人でも、その91.5%が「学校・職場・地域で、同性愛者や性別を変えた人も、差別なく公平に扱われるための法律・条令の整備」に賛成している。

問13 制度や取り組みについて

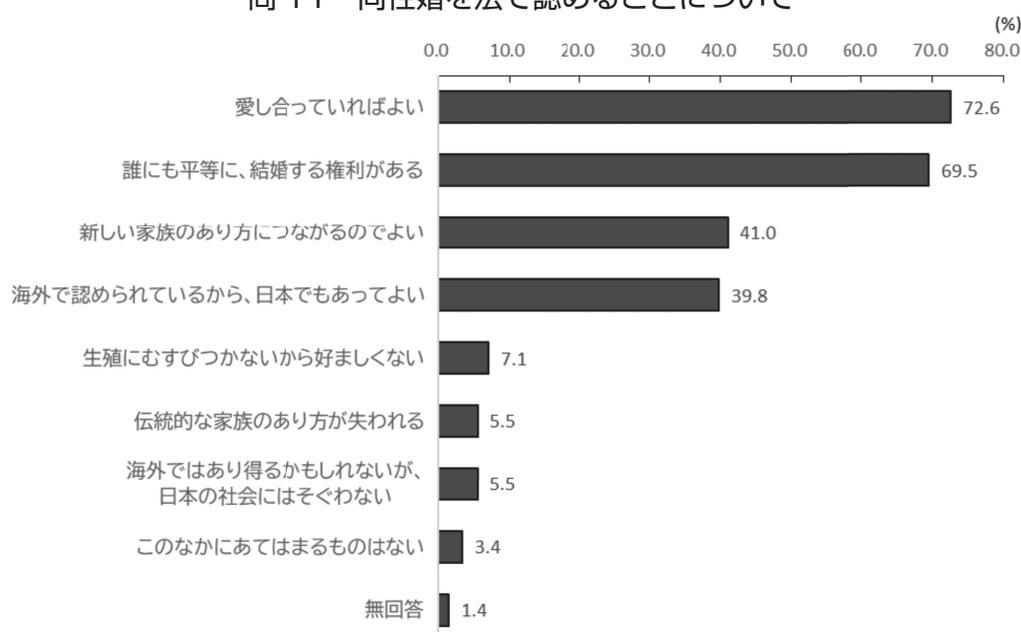


	賛成 (%)	反対 (%)
(ア) 同性愛という性のあり方があることや、性別を変えたいと望む人のことを、義務教育で教えること	89.0	10.6
(イ) 同性カップル(女性どうし・男性どうしのカップル)が、法的に結婚できる制度	89.6	9.9
(ウ) 親が育てられない子どもを、同性カップルが養子や里子として迎え、育てることのできる制度	88.2	11.3
(エ) 女性どうしのカップルが、生殖補助医療などによって、子どもをもてるようにする制度	85.9	13.7
(オ) 学校・職場・地域で、同性愛者や性別を変えた人も、差別なく公平に扱われるための法律・条令の整備	93.4	6.1
(カ) 学校・職場・地域における、多様な性のあり方についての啓発	91.6	7.9

※「賛成」と「やや賛成」を合算して「賛成」、「反対」と「やや反対」を合算して「反対」とした

問 13 で「同性カップル(女性どうし・男性どうしのカップル)が、法的に結婚できる制度」について 89.6% が賛成している。問 10 であげた「男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい」という考えに賛成する回答(79.3%)より、同性どうしの結婚を法律で認めることへの賛成のほうが 10 ポイント以上高い。同性どうしの結婚を法で認めるかどうかに関する考えを尋ねた問 11 においても、下図に示すように肯定的な意見が上位を占める。

問 11 同性婚を法で認めることについて



4. 学生が有する経験の影響

上記を踏まえ本稿では、問 10 の「少子化対策」「夫婦別姓」「同性カップルの子育て」の 3 項目、問 12 の「身体の性別二元論」「差別禁止法」「社会秩序」の 3 項目、合計 6 項目に注目し、各設問との関係をみながら、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みに関する学生の意識について検討する⁹。

問 1 (1) によると、(ア) 女性の人権について学んだことがある回答者は 84.7% (1413 人)、(イ) 同性愛・両性愛、性愛の多様性について学んだことがある回答者は 74.7% (1246 人)、(ウ) 性同一性障害、トランスジェンダー、性別違和、性別の多様性について学んだことがある回答者は

⁹ 問 10 の全 7 項目と問 12 の全 12 項目の各回答を得点化し、因子分析(主因子法、バリマックス法)を行なったところ、5 個の因子が抽出された。特定の共通因子から質問群をまとめた検討も可能であるが、本稿の関心に照らし、問 10 から 3 項目、問 12 から 3 項目の計 6 項目に対する意見を個別に検討することとした。

76.3% (1273人)であった。問1(2)では、それぞれのテーマについて学んだ学校種を、小学校、中学校、高校・専門学校、大学から複数選択するかたちで学習経験を尋ねている。(ア)(イ)(ウ)のいずれも学んでいない回答者が7.3%(117人)、いずれかを学んだ回答者が21.5%(345人)、すべて学んだ回答者が68.2%(1139人)である。

これら学習経験と問10・問12から抜粋した6項目の関係を下表でみると¹⁰、学習経験のある回答者のほうが、少子化対策としての結婚・出産の奨励、夫婦別姓、同性カップルの子育てを支持している。上記(ア)(イ)(ウ)3つのテーマのすべてを学んだ回答者のうち、身体における性別二元論を支持する者は43.5%である一方、いずれも学んでいない回答者のそれは52.1%で8.6ポイント高い。「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考えに賛成する者についてみると、3つのテーマのすべてを学んだ者のうち31.7%がこの考えに賛成する一方、いずれも学んでいない者の43.6%が賛成しており約12ポイント高い。「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考えについては、学習経験の多少において回答に差はみられない。

問10(ア) 少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ											
		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば ばそう思う		どちらかといえば ばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
学習経験	いずれも学んでいない	14.5%	35.9%	18.8%	30.8%	0.0%			117	50.4%	49.6%
	いずれか学んだ	27.0%	31.6%	22.3%	18.6%	0.6%			345	58.6%	40.9%
	すべて学んだ	21.5%	36.8%	19.1%	22.3%	0.4%			1139	58.3%	41.4%
	合計	22.2%	35.6%	19.7%	22.1%	0.4%			1601		

問10(カ) 夫と妻は、名字(姓)を同じにする必要はなく、名字が違ってよい											
		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば ばそう思う		どちらかといえば ばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
学習経験	いずれも学んでいない	33.3%	27.4%	21.4%	17.9%	0.0%			117	60.7%	39.3%
	いずれか学んだ	43.5%	21.7%	23.5%	11.3%	0.0%			345	65.2%	34.8%
	すべて学んだ	43.4%	24.2%	19.3%	12.8%	0.3%			1139	67.6%	32.1%
	合計	42.7%	23.9%	20.4%	12.9%	0.2%			1601		

問10(キ) 男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい											
		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば ばそう思う		どちらかといえば ばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
学習経験	いずれも学んでいない	35.0%	35.0%	12.8%	17.1%	0.0%			117	70.1%	29.9%
	いずれか学んだ	54.8%	24.1%	14.2%	7.0%	0.0%			345	78.8%	21.2%
	すべて学んだ	54.6%	26.0%	11.5%	7.9%	0.0%			1139	80.6%	19.4%
	合計	53.2%	26.2%	12.2%	8.4%	0.0%			1601		

問12(イ) 身体の性は、男と女の2つのみである											
		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば ばそう思う		どちらかといえば ばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
学習経験	いずれも学んでいない	33.3%	18.8%	15.4%	32.5%	0.0%			117	52.1%	47.9%
	いずれか学んだ	35.1%	22.0%	13.6%	29.0%	0.3%			345	57.1%	42.6%
	すべて学んだ	25.0%	18.5%	20.1%	36.1%	0.3%			1139	43.5%	56.2%
	合計	27.8%	19.3%	18.4%	34.3%	0.2%			1601		

問12(ウ) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる											
		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば ばそう思う		どちらかといえば ばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
学習経験	いずれも学んでいない	23.1%	29.9%	30.8%	15.4%	0.9%			117	53.0%	46.2%
	いずれか学んだ	24.3%	25.8%	32.2%	17.1%	0.6%			345	50.1%	49.3%
	すべて学んだ	23.2%	29.1%	29.3%	18.3%	0.2%			1139	52.2%	47.6%
	合計	23.4%	28.4%	30.0%	17.8%	0.3%			1601		

¹⁰ 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした。

		問12(シ) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる							
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
学習経験	いずれも学んでいない	14.5%	29.1%	26.5%	29.9%	0.0%	117	43.6%	56.4%
	いずれか学んだ	11.6%	24.1%	33.3%	30.7%	0.3%	345	35.7%	64.1%
	すべて学んだ	10.3%	21.4%	32.0%	36.2%	0.2%	1139	31.7%	68.1%
	合計	10.9%	22.5%	31.9%	34.5%	0.2%	1601		

次に暴力経験との関係を見る。問2では、小学校から高校時代のあいだに、(ア) 不快な冗談、からかい、(イ) 身体的暴力、(ウ) 「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことにかかわる、不快な冗談、からかい、(エ) 「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことでふるわれる身体的暴力の4項目について、自分が受けたことがあるかどうか、見聞きしたことがあるかどうかを尋ねている。小学校から高校時代のあいだに、(ア) 不快な冗談、からかいについて、自分が受けたことがある回答者は39.5% (660人)、見聞きしたことがある回答者は67.0% (1119人)、(イ) 身体的暴力について、自分が受けたことがある回答者は12.6% (211人)、見聞きしたことがある回答者は35.8% (597人)である。(ウ) 「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことにかかわる、不快な冗談、からかいについて、自分が受けたことがある回答者は7.7% (129人)、見聞きしたことがある回答者は45.7% (762人)、(エ) 「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことでふるわれる身体的暴力について、自分が受けたことがある回答者は1.6% (27人)、見聞きしたことがある回答者は12.6% (210人)である。

4項目について、(1) 自分が受けたことがあるかどうか、(2) 見聞きしたことがあるかどうかの設問で、「ある」と回答していれば1点、「ない」と回答していれば0点として得点化し合算した。無回答は除外している。こうして作成した「不快な冗談、からかい、身体的暴力」得点を3等分し、「低群」「中群」「高群」とカテゴリー化した。

3群にカテゴリー化した暴力経験と問10・問12から抜粋した6項目の関係を下表で確認する¹¹⁾。暴力を自分が受けたことや見聞きしたことがある回答者のほうが、「身体の性は、男と女の2つのみである」、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」といった考えに賛成する傾向が示された。

		問10(エ) 少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ							
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
不快な冗談、からかい、身体的暴力	低群	20.8%	35.5%	18.6%	24.4%	0.7%	606	56.3%	43.1%
	中群	19.6%	39.9%	19.6%	20.7%	0.2%	526	59.5%	40.3%
	高群	26.7%	31.3%	21.8%	20.2%	0.0%	431	58.0%	42.0%
	合計	22.0%	35.8%	19.8%	22.0%	0.3%	1563		

		問10(カ) 夫と妻は、名字(姓)を同じにする必要はなく、名字が違ってよい							
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
不快な冗談、からかい、身体的暴力	低群	40.3%	21.9%	22.6%	15.0%	0.2%	606	62.2%	37.6%
	中群	42.4%	29.5%	19.4%	8.7%	0.0%	526	71.9%	28.1%
	高群	45.9%	21.1%	19.0%	13.7%	0.2%	431	67.1%	32.7%
	合計	42.5%	24.2%	20.5%	12.5%	0.1%	1563		

¹¹⁾ 「そう思う」と「どちらかといえはそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえはそう思わない」を合算して「不賛成」とした。

		問10(イ) 男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい							
		どちらかといえばそう思う		どちらかといえばそう思わない		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
不快な冗談、からかい、 身体的暴力	低群	50.7%	25.9%	13.2%	10.2%	0.0%	606	76.6%	23.4%
	中群	57.4%	27.9%	10.1%	4.6%	0.0%	526	85.4%	14.6%
	高群	52.0%	24.4%	15.3%	8.4%	0.0%	431	76.3%	23.7%
	合計	53.3%	26.2%	12.7%	7.8%	0.0%	1563		

		問12(カ) 身体の性は、男と女の2つのみである							
		どちらかといえばそう思う		どちらかといえばそう思わない		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
不快な冗談、からかい、 身体的暴力	低群	24.8%	20.0%	20.3%	34.7%	0.3%	606	44.7%	55.0%
	中群	25.1%	20.5%	18.3%	36.1%	0.0%	526	45.6%	54.4%
	高群	33.4%	17.6%	17.2%	31.6%	0.2%	431	51.0%	48.7%
	合計	27.3%	19.5%	18.7%	34.3%	0.2%	1563		

		問12(キ) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる							
		どちらかといえばそう思う		どちらかといえばそう思わない		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
不快な冗談、からかい、 身体的暴力	低群	23.6%	27.9%	28.5%	19.5%	0.5%	606	51.5%	48.0%
	中群	20.0%	30.2%	32.3%	17.3%	0.2%	526	50.2%	49.6%
	高群	28.1%	28.8%	28.8%	14.2%	0.2%	431	56.8%	42.9%
	合計	23.6%	28.9%	29.9%	17.3%	0.3%	1563		

		問12(ク) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる							
		どちらかといえばそう思う		どちらかといえばそう思わない		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
不快な冗談、からかい、 身体的暴力	低群	10.4%	22.6%	31.0%	35.6%	0.3%	606	33.0%	66.7%
	中群	8.2%	21.9%	37.5%	32.5%	0.0%	526	30.0%	70.0%
	高群	14.4%	24.6%	28.5%	32.3%	0.2%	431	39.0%	60.8%
	合計	10.7%	22.9%	32.5%	33.7%	0.2%	1563		

問4と問5では性的マイノリティとの接触経験について、問6では性的マイノリティからのカミングアウト経験について尋ねている。具体的には、問4で、クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいるかどうか、問5で、クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいるかどうか、問6で、同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えたい・性別に違和感をもっているといったことを伝えられた（カミングアウトされた）ことがあるかどうかについて尋ねた。問4と問5では、「いる」「そうかもしれない人がいる」「いないと思う」「いない」から一択、問6では、「ある」「ない」「その他」から一択である。

全体の結果を示すと、まわりに同性愛者が「いる」14.7%（246人）、「そうかもしれない人がいる」8.9%（148人）、「いないと思う」42.8%（715人）、「いない」33.2%（554人）である。また、まわりに性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人が「いる」3.5%（58人）、「そうかもしれない人がいる」4.4%（73人）、「いないと思う」36.9%（616人）、「いない」54.9%（917人）である。さらに、カミングアウトされた経験が「ある」13.7%（228人）、「ない」85.1%（1420人）、「その他」1.0%（17人）である。

性的マイノリティとの接触経験（「いる」もしくは「いない」と回答した者に注目する）、ならびに性的マイノリティからのカミングアウト経験（「ある」もしくは「ない」と回答した者に注目する）と、問10・問12から抜粋した6項目の関係を以下の表でみたところ¹²、次のような傾向が示された。

¹² 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした。

- 性的マイノリティが周囲にいない者のほうが、少子化対策としての結婚や出産を奨励すべきという考え方、身体における性別二元論の考え方に賛成している
- 同性愛者がまわりにいない者のほうが、「男でも女でもない性」の人数が増えると、社会秩序が乱れるという考え方に賛成している
- 性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がまわりにいる人のほうが、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考え方に賛成している
- 同性愛者がまわりにいる者および性的マイノリティからカミングアウトされた経験のある者のほうが、夫婦別姓に賛成である
- 性的マイノリティがまわりにいる者および性的マイノリティからカミングアウトされた経験のある者のほうが、同性カップルの子育てに賛成である

		どちらかといえば				無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない				
問4 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	21.5%	31.7%	17.9%	28.5%	0.4%	246	53.3%	46.3%
	そうかもしれない人がいる	17.6%	38.5%	21.6%	21.6%	0.7%	148	56.1%	43.2%
	いないと思う	19.6%	38.2%	20.1%	21.5%	0.6%	715	57.8%	41.7%
	いない	27.3%	32.9%	19.0%	20.8%	0.2%	554	60.1%	39.7%
	無回答	0.0%	16.7%	33.3%	33.3%	16.7%	6		
合計		22.2%	35.4%	19.6%	22.3%	0.5%	1669		
問5 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	27.6%	25.9%	20.7%	25.9%	0.0%	58	53.4%	46.6%
	そうかもしれない人がいる	26.0%	26.0%	17.8%	30.1%	0.0%	73	52.1%	43.8%
	いないと思う	18.5%	36.7%	22.2%	21.4%	1.1%	616	55.2%	58.9%
	いない	24.1%	35.9%	17.9%	22.1%	0.0%	917	60.0%	53.8%
	無回答	0.0%	40.0%	20.0%	20.0%	20.0%	5		
合計		22.2%	35.4%	19.6%	22.3%	0.5%	1669		
問6 同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えた・性別に違和感をもっているといったことを伝えられた(カミングアウトされた)ことがある	ある	22.4%	33.3%	20.6%	23.7%	0.0%	228	55.7%	53.9%
	ない	22.2%	35.8%	19.4%	22.0%	0.5%	1420	58.0%	55.3%
	その他	17.6%	35.3%	11.8%	35.3%	0.0%	17		
	無回答	25.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%	4		
	合計		22.2%	35.4%	19.6%	22.3%	0.5%	1669	

		どちらかといえば				無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない				
問4 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	51.6%	17.9%	16.7%	13.8%	0.0%	246	69.5%	34.6%
	そうかもしれない人がいる	49.3%	22.3%	17.6%	10.8%	0.0%	148	71.6%	39.9%
	いないと思う	41.7%	28.3%	18.9%	10.8%	0.4%	715	69.9%	47.1%
	いない	37.4%	22.0%	24.7%	15.7%	0.2%	554	59.4%	46.8%
	無回答	33.3%	16.7%	16.7%	16.7%	16.7%	6		
合計		42.4%	24.1%	20.4%	12.9%	0.3%	1669		
問5 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	53.4%	13.8%	17.2%	15.5%	0.0%	58	67.2%	31.0%
	そうかもしれない人がいる	41.1%	20.5%	21.9%	16.4%	0.0%	73	61.6%	42.5%
	いないと思う	42.9%	28.1%	17.2%	11.4%	0.5%	616	70.9%	45.3%
	いない	41.5%	22.5%	22.6%	13.3%	0.1%	917	64.0%	45.0%
	無回答	20.0%	0.0%	20.0%	40.0%	20.0%	5		
合計		42.4%	24.1%	20.4%	12.9%	0.3%	1669		
問6 同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えた・性別に違和感をもっているといったことを伝えられた(カミングアウトされた)ことがある	ある	51.8%	21.9%	14.9%	11.4%	0.0%	228	73.7%	36.8%
	ない	41.0%	24.4%	21.3%	13.0%	0.3%	1420	65.4%	45.7%
	その他	35.3%	23.5%	17.6%	23.5%	0.0%	17		
	無回答	25.0%	25.0%	25.0%	0.0%	25.0%	4		
	合計		42.4%	24.1%	20.4%	12.9%	0.3%	1669	

		どちらかといえば				無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない				
問4 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	67.5%	17.1%	6.9%	8.5%	0.0%	246	84.6%	24.0%
	そうかもしれない人がいる	58.1%	23.6%	13.5%	4.7%	0.0%	148	81.8%	37.2%
	いないと思う	52.6%	30.3%	10.5%	6.4%	0.1%	715	82.9%	40.8%
	いない	45.7%	26.0%	17.0%	11.4%	0.0%	554	71.7%	43.0%
	無回答	33.3%	33.3%	0.0%	16.7%	16.7%	6		
合計		52.9%	26.4%	12.3%	8.3%	0.1%	1669		
問5 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	60.3%	25.9%	6.9%	6.9%	0.0%	58	86.2%	32.8%
	そうかもしれない人がいる	61.6%	17.8%	9.6%	11.0%	0.0%	73	79.5%	27.4%
	いないと思う	55.7%	27.6%	10.1%	6.5%	0.2%	616	83.3%	37.7%
	いない	50.1%	26.2%	14.5%	9.3%	0.0%	917	76.2%	40.7%
	無回答	20.0%	40.0%	0.0%	20.0%	20.0%	5		
合計		52.9%	26.4%	12.3%	8.3%	0.1%	1669		
問6 同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えた・性別に違和感をもっているといったことを伝えられた(カミングアウトされた)ことがある	ある	66.7%	18.4%	8.3%	6.6%	0.0%	228	85.1%	26.8%
	ない	50.8%	27.6%	13.0%	8.5%	0.1%	1420	78.4%	40.6%
	その他	52.9%	23.5%	11.8%	11.8%	0.0%	17		
	無回答	25.0%	50.0%	0.0%	0.0%	25.0%	4		
	合計		52.9%	26.4%	12.3%	8.3%	0.1%	1669	

問12(ウ) 身体の性は、男と女の2つのみである									
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思う	そう思わない				
問4 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	29.7%	14.2%	15.9%	40.2%	0.0%	246	43.9%	30.1%
	そうかもしれない人がいる	25.0%	18.9%	18.2%	37.8%	0.0%	148	43.9%	37.2%
	いないと思う	25.2%	20.1%	18.5%	35.7%	0.6%	715	45.3%	38.6%
	いない	30.9%	20.6%	19.5%	29.1%	0.0%	554	51.4%	40.1%
	無回答	0.0%	16.7%	0.0%	50.0%	33.3%	6		
合計		27.6%	19.3%	18.3%	34.4%	0.4%	1669		
問5 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	27.6%	12.1%	20.7%	39.7%	0.0%	58	39.7%	32.8%
	そうかもしれない人がいる	26.0%	19.2%	16.4%	37.0%	1.4%	73	45.2%	35.6%
	いないと思う	24.7%	17.4%	18.2%	39.3%	0.5%	616	42.0%	35.6%
	いない	29.9%	21.2%	18.4%	30.5%	0.0%	917	51.0%	39.6%
	無回答	0.0%	0.0%	20.0%	40.0%	40.0%	5		
合計		27.6%	19.3%	18.3%	34.4%	0.4%	1669		
問6 同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えた、あるいは性別に違和感をもっているといったことを伝えられた(カミングアウトされた)ことがある	ある	28.9%	14.5%	16.2%	40.4%	0.0%	228	43.4%	30.7%
	ない	27.6%	20.1%	18.7%	33.3%	0.3%	1420	47.7%	38.8%
	その他	17.6%	11.8%	17.6%	52.9%	0.0%	17		
	無回答	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	50.0%	4		
	合計		27.6%	19.3%	18.3%	34.4%	0.4%	1669	

問12(ウ) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる									
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思う	そう思わない				
問4 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	29.3%	25.2%	26.8%	17.9%	0.8%	246	54.5%	52.0%
	そうかもしれない人がいる	23.6%	31.8%	23.6%	20.9%	0.0%	148	55.4%	55.4%
	いないと思う	21.0%	28.3%	34.4%	15.9%	0.4%	715	49.2%	62.7%
	いない	25.5%	29.2%	27.3%	18.1%	0.0%	554	54.7%	56.5%
	無回答	0.0%	33.3%	16.7%	16.7%	33.3%	6		
合計		23.8%	28.5%	29.9%	17.4%	0.4%	1669		
問5 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	29.3%	36.2%	13.8%	20.7%	0.0%	58	65.5%	50.0%
	そうかもしれない人がいる	26.0%	31.5%	19.2%	20.5%	2.7%	73	57.5%	50.7%
	いないと思う	22.2%	26.0%	32.5%	19.0%	0.3%	616	48.2%	58.4%
	いない	24.5%	29.3%	30.2%	15.8%	0.1%	917	53.9%	59.5%
	無回答	0.0%	40.0%	0.0%	20.0%	40.0%	5		
合計		23.8%	28.5%	29.9%	17.4%	0.4%	1669		
問6 同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えた、あるいは性別に違和感をもっているといったことを伝えられた(カミングアウトされた)ことがある	ある	23.7%	28.1%	28.1%	19.3%	0.9%	228	51.8%	56.1%
	ない	23.8%	28.7%	30.3%	17.0%	0.2%	1420	52.5%	58.9%
	その他	35.3%	17.6%	23.5%	23.5%	0.0%	17		
	無回答	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	50.0%	4		
	合計		23.8%	28.5%	29.9%	17.4%	0.4%	1669	

問12(ウ) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる									
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思う	そう思わない				
問4 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	12.2%	21.1%	31.3%	35.0%	0.4%	246	33.3%	52.4%
	そうかもしれない人がいる	9.5%	23.0%	29.7%	37.8%	0.0%	148	32.4%	52.7%
	いないと思う	9.0%	21.5%	34.3%	35.0%	0.3%	715	30.5%	55.8%
	いない	13.7%	26.0%	29.4%	30.9%	0.0%	554	39.7%	55.4%
	無回答	0.0%	0.0%	16.7%	50.0%	33.3%	6		
合計		11.0%	23.0%	31.8%	33.9%	0.3%	1669		
問5 クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	20.7%	12.1%	32.8%	34.5%	0.0%	58	32.8%	44.8%
	そうかもしれない人がいる	19.2%	16.4%	28.8%	32.9%	2.7%	73	35.6%	45.2%
	いないと思う	8.6%	21.4%	31.3%	38.5%	0.2%	616	30.0%	52.8%
	いない	11.3%	25.4%	32.4%	30.9%	0.0%	917	36.8%	57.8%
	無回答	20.0%	0.0%	0.0%	40.0%	40.0%	5		
合計		11.0%	23.0%	31.8%	33.9%	0.3%	1669		
問6 同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えた、あるいは性別に違和感をもっているといったことを伝えられた(カミングアウトされた)ことがある	ある	14.0%	21.9%	28.9%	34.6%	0.4%	228	36.0%	50.9%
	ない	10.6%	23.2%	32.4%	33.7%	0.1%	1420	33.8%	55.6%
	その他	11.8%	17.6%	17.6%	52.9%	0.0%	17		
	無回答	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	50.0%	4		
	合計		11.0%	23.0%	31.8%	33.9%	0.3%	1669	

問9では「あなたのまわりの人で、次のようなことをしてくれる人はいますか」との問いで、(ア) あなたの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる人、(イ) あなたの能力や努力を評価してくれる人、(ウ) あなたや家族が病気で寝込んだときなどに看病や家事を頼める人の3つの項目について、「いる」「いない」のいずれか1つを選択するよう求めた。(ア) あなたの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる人については、「いる」94.2% (1572人)、「いない」5.7% (95人)、(イ) あなたの能力や努力を評価してくれる人については、「いる」92.6% (1546人)、「いない」7.2% (120人)である。(ウ) あなたや家族が病気で寝込んだときなどに看病や家事を頼める人については、「いる」86.1% (1437人)、「いない」13.7% (229人)である。

これらケアにかかわる行為をしてくれる人が「いる」場合1点、「いない」場合0点として得点化し合算した「ケア関係」得点を、ケア関係が少ない群と、ケア関係が多い群にグループ化した。

問 10・問 12 から抜粋した 6 項目との関係を下表でみたところ¹³、次のような傾向が示された。

- ケア関係が少ない回答者のほうが、身体における性別二元論の考え方に賛成している
- ケア関係が少ない回答者のほうが、「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れるという考え方に賛成している
- ケア関係が多い回答者のほうが「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考え方に賛成している

		問10(エ) 少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ							
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
ケア関係	少	17.9%	37.2%	19.9%	24.4%	0.6%	312	55.1%	44.2%
	多	23.2%	35.1%	19.5%	21.9%	0.3%	1354	58.3%	41.4%
	合計	22.2%	35.5%	19.6%	22.4%	0.4%	1666		

		問10(カ) 夫と妻は、名字(姓)を同じにする必要はなく、名字が違ってよい							
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
ケア関係	少	42.6%	26.6%	17.9%	12.8%	0.0%	312	69.2%	30.8%
	多	42.4%	23.5%	21.0%	12.9%	0.2%	1354	65.9%	33.9%
	合計	42.4%	24.1%	20.4%	12.9%	0.2%	1666		

		問10(キ) 男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい							
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
ケア関係	少	50.0%	25.6%	13.5%	10.9%	0.0%	312	75.6%	24.4%
	多	53.7%	26.5%	12.1%	7.7%	0.0%	1354	80.2%	19.8%
	合計	53.0%	26.4%	12.4%	8.3%	0.0%	1666		

		問12(ク) 身体の性は、男と女の2つのみである							
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
ケア関係	少	32.4%	19.9%	14.4%	33.0%	0.3%	312	52.2%	47.4%
	多	26.6%	19.2%	19.2%	34.7%	0.3%	1354	45.8%	53.9%
	合計	27.7%	19.3%	18.3%	34.4%	0.3%	1666		

		問12(ケ) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる							
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
ケア関係	少	21.8%	24.7%	32.4%	21.2%	0.0%	312	46.5%	53.5%
	多	24.3%	29.4%	29.3%	16.5%	0.4%	1354	53.7%	45.9%
	合計	23.8%	28.5%	29.9%	17.4%	0.4%	1666		

		問12(コ) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる							
		どちらかといえば		どちらかといえば		無回答	合計 (n)	賛成	不賛成
		そう思う	ばそう思う	ばそう思わない	そう思わない				
ケア関係	少	13.8%	26.6%	27.6%	32.1%	0.0%	312	40.4%	59.6%
	多	10.3%	22.2%	32.8%	34.4%	0.3%	1354	32.5%	67.2%
	合計	11.0%	23.0%	31.8%	34.0%	0.2%	1666		

下表は問 10・問 12 から抜粋した 6 項目と問 13 の 6 項目との相関を示した。問 13 であげた 6 つの制度や取り組みについて「賛成」= 4 点、「やや賛成」= 3 点、「やや反対」= 2 点、「反対」= 1 点として得点化した。無回答は除外している。

¹³ 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした。

同性カップルの子育てについては、6項目すべてに、0.2～0.5の有意な相関があった。つまり同性カップルの子育てに賛成している回答者は、本調査であげた6つの制度や取り組み——性の多様性に関する教育、同性婚制度、同性カップルによる養親や里親としての子育て制度、女性カップルによる生殖補助医療制度の活用、性的マイノリティに関する非差別平等の法律・条令、性の多様性に関する啓発——に賛成する傾向がある。なかでも同性どうしの結婚制度、同性カップルに関わる子産み・子育て制度との相関は0.4を越える。

一方、「身体の性は、男と女の2つのみである」という考え方に賛成する回答者は、これら6つの制度や取り組みのほぼすべての項目に0.2を越えて逆相関する。「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考え方に賛成する回答者については、これら6つの制度や取り組みのすべての項目に0.2～0.5の逆相関がある。つまり身体の性別二元論や社会秩序の維持といった考えに賛成する回答者は、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みに不賛成である傾向を示している。「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考え方と同性婚制度には0.4を越える逆相関がみられる。「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」については0.1を越える有意な相関はない。

	問13(7) 同性愛と いう性のあり方が あることや、性別 を変えたいと望む 教育で教えること 度	問13(4) 同性カッ プル(女性どうし ・男性どうし) カップル)が、法 的に結婚できる制 度	問13(6) 親が育て られない子ども を、同性カップル が養子や里子とし て迎え、育てるこ とのできる制度	問13(5) 女性どう しのカップルが、 生殖補助医療など によって、子ども をもてるようにす る制度	問13(8) 学校・職 場・地域で、同性 愛者や性別を変え た人も、差別なく 公平に扱われるた めの法律・条令の 整備	問13(9) 学校・職 場・地域におけ る多様な性のあ り方についての啓 発
問10(イ) 少子化対策として、結婚や出産を 奨励すべきだ	-.050*	-.182**	-.086**	-.080**	-.073**	-.071**
問10(カ) 夫と妻は、名字(姓)を同じにする 必要はなく、名字が違ってよい	.147**	.240**	.187**	.202**	.189**	.126**
問10(キ) 男性どうしや、女性どうしの カップルが、子どもを育ててもよい	.269**	.421**	.482**	.443**	.322**	.296**
問12(ウ) 身体の性は、男と女の2つのみである	-.164**	-.274**	-.209**	-.232**	-.233**	-.221**
問12(エ) 性的マイノリティに対する差別を 法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる	-0.024	-.054*	-0.025	-0.042	-.058*	-0.027
問12(オ) 「男でも女でもない性」の人が 増えると、社会秩序が乱れる	-.216**	-.404**	-.274**	-.307**	-.322**	-.315**

**p<0.01 *p<0.05

下表は、問10・問12から抜粋した6項目と問17の6項目との相関を示す。問17では、性別の認識や身体の性別を変えることについての考えを4件法で尋ねた。「そう思う」から「そう思わない」を4点から1点で得点化した。無回答は除外している。

同性カップルの子育てについては、6項目すべてに、0.2～0.4の有意な逆相関があった。つまり同性カップルの子育てに賛成している回答者は、問17であげた考え——「自分は男性でも女性でもない」という認識をもつことには賛同できない、「自分は男性でもあり女性でもある」という認識をもつことには賛同できない、性別を男性から女性に変えることには賛同できない、性別を女性から男性に変えることには賛同できない、性別適合手術(性転換手術)は道徳的にまちがっている——に賛成しない傾向がある。

一方、「身体の性は、男と女の2つのみである」という考え方、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考え方への賛成は、問17であげた6つの項目すべてに0.2～0.6の有意な相関がある。つまり身体における性別二元論の考えや「社会秩序が乱れる」という考えに賛成する回答者は、「自分は男性でも女性でもない」という認識や「自分は男性でもあり女性でもある」という認識をもつことに賛同できず、性別を男性から女性に変えることや、女性から

男性に変えることにも賛同できない。また性別適合手術は道徳的にまちがっているという考えに賛成する。「身体の性は、男と女の2つのみである」という考え方と、「『自分は男性でも女性でもない』という認識をもつことには賛同できない」ならびに「『自分は男性でもあり女性でもある』という認識をもつことには賛同できない」という項目の相関は0.4を越える。「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考え方については、性自認を否定する項目との相関が0.5を越える。性自認の否定、性別変更の否定、性別適合手術の否定といったいずれの項目についても、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」という考え方に賛成する者が強く賛同する傾向にある。「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」については0.2を越える相関はない。

	問17(ア) 「自分は男性でも女性でもない」という認識をもつことには、賛同できない	問17(イ) 「自分は男性でもあり女性でもある」という認識をもつことには、賛同できない	問17(ウ) 性別を男性から女性に変えることには、賛同できない	問17(エ) 性別を女性から男性に変えることには、賛同できない	問17(オ) 性別適合手術（性転換手術）は、道徳的にまちがっている
問10(エ) 少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ	.202**	.182**	.168**	.166**	.158**
問10(カ) 夫と妻は、名字（姓）を同じにする必要はなく、名字が違ってよい	-.163**	-.168**	-.155**	-.168**	-.156**
問10(キ) 男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい	-.267**	-.273**	-.326**	-.333**	-.284**
問12(ウ) 身体の性は、男と女の2つのみである	.430**	.431**	.279**	.274**	.241**
問12(サ) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる	.115**	.126**	.076**	.073**	0.044
問12(シ) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる	.529**	.529**	.370**	.372**	.348**

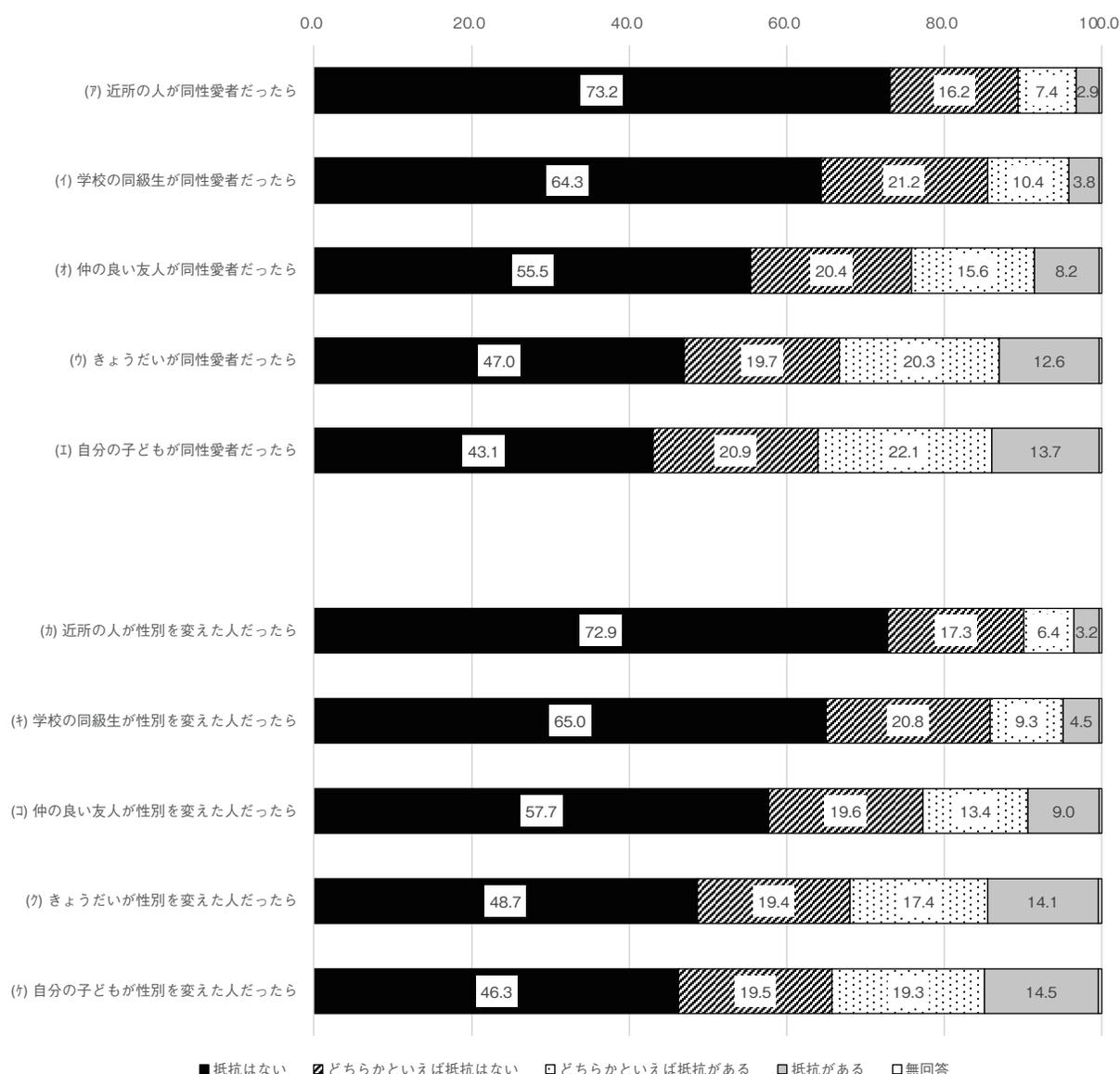
**p<0.01 *p<0.05

III. 「抵抗感」と「不快感・嫌悪感」

1. 「抵抗感」と「不快感・嫌悪感」

本調査では、問14と問15で同性愛者や性別を変えた人に対する抵抗感、問16で性的マイノリティの性表現、性的指向、性行為に対する不快感・嫌悪感を尋ねている。問14は、「近所の人」「学校の同級生」「きょうだい」「自分の子ども」「仲の良い友人」が同性愛者だったら、また性別を変えた人だったら、どう思うかを尋ねた。回答結果は下図のとおりである。「抵抗はない」と「どちらかと言えば抵抗はない」の合算割合が高かった順に上から並べている。同性愛者に対しても、性別を変えた人に対しても、「近所の人」→「学校の同級生」→「仲の良い友人」→「きょうだい」→「自分の子ども」の順に抵抗感は強くなる。きょうだいや自分の子どもの場合に抱く抵抗感は、同性愛者、性別を変えた人、いずれに対しても3割を越える。

問 14 同性愛者や性別を変えた人に対する抵抗感



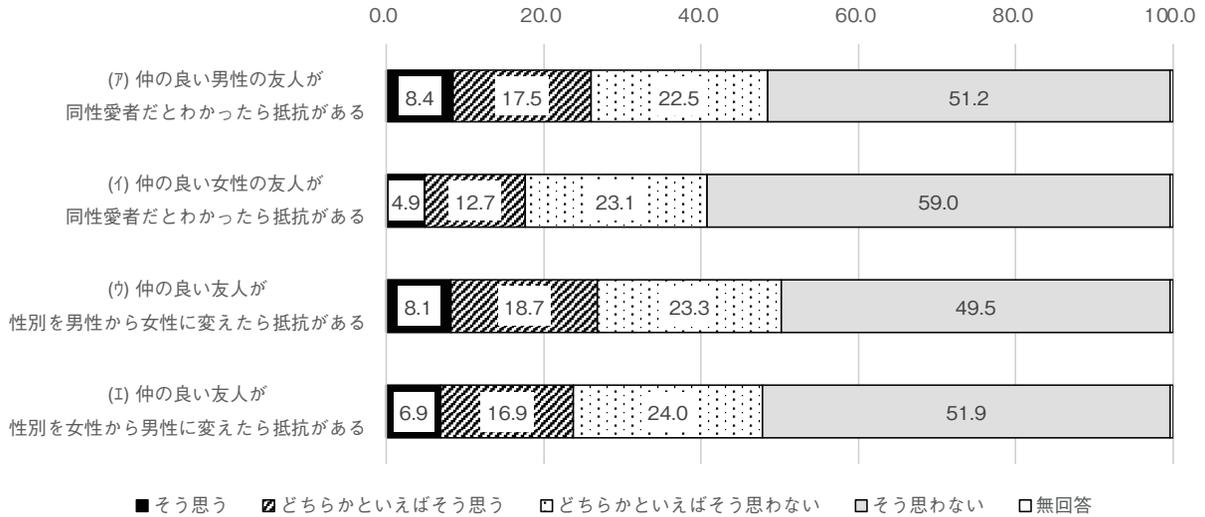
	抵抗感なし(%)	抵抗感あり(%)
(ア) 近所の人	89.3	10.4
(イ) 学校の同級生	85.5	14.2
(ロ) 仲の良い友人	75.9	23.8
(ウ) きょうだい	66.7	33.0
(エ) 自分子ども	63.9	35.8
(カ) 近所の人	90.1	9.6
(キ) 学校の同級生	85.8	13.8
(ク) 仲の良い友人	77.3	22.4
(コ) きょうだい	68.1	31.5
(ケ) 自分子ども	65.8	33.8

※「抵抗はない」と「どちらかといえば抵抗はない」を合算して「抵抗感なし」、「抵抗がある」と「どちらかといえば抵抗がある」を合算して「抵抗感あり」とした

問 15 では、仲の良い友人が同性愛者だったり性別を変えたりした場合の抵抗感を尋ねた。下図をみると、仲の良い女性の友人が同性愛者だとわかった場合の抵抗感（17.6%）より、仲の良い男性の友人が同性愛者だとわかった場合の抵抗感（25.9%）のほうが強く、その差は 8.3 ポイン

トである。仲の良い友人が性別を女性から男性に変えた場合の抵抗感（23.8%）と、仲の良い友人が性別を男性から女性に変えた場合の抵抗感（26.8%）の差は3ポイントとわずかである。性別を変えた人が男性、女性問わず、仲の良い友人が性別を変えた場合の抵抗感は25%前後を示す。

問 15 仲の良い人が同性愛者だったり性別を変えたりした場合について



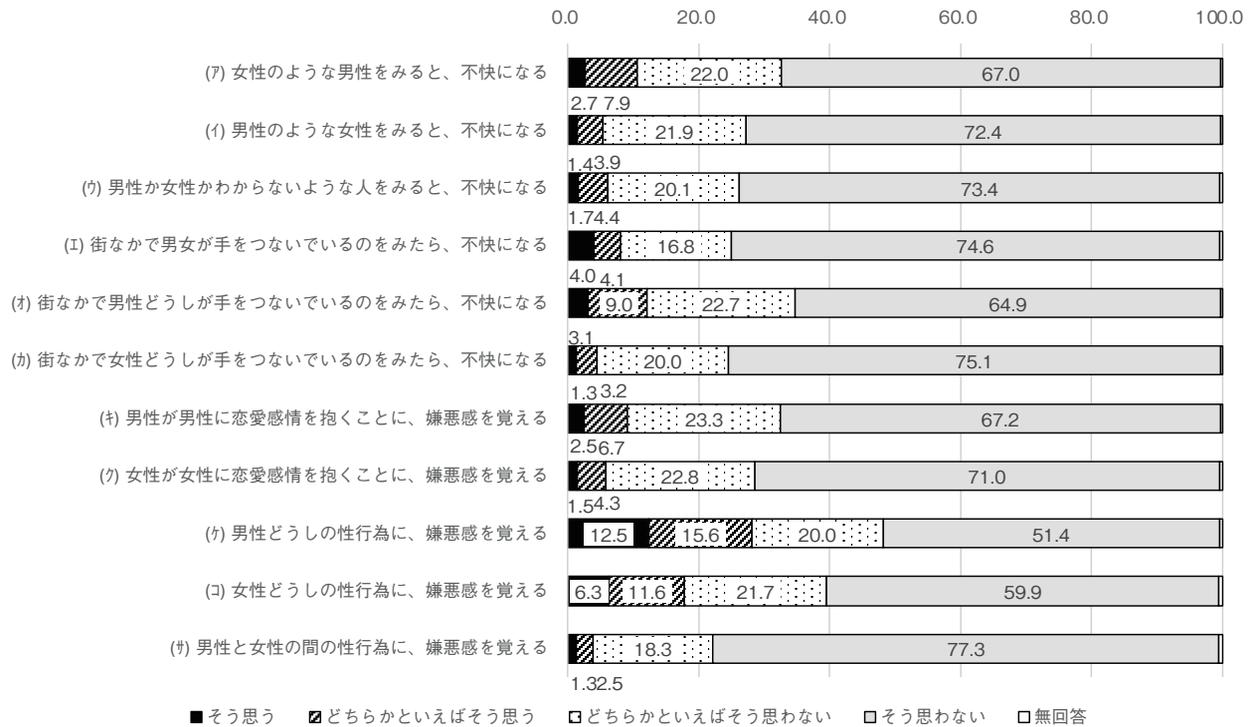
	賛成 (%)	不賛成 (%)
(ア) 仲の良い男性の友人が同性愛者だとわかったら抵抗がある	25.9	73.7
(イ) 仲の良い女性の友人が同性愛者だとわかったら抵抗がある	17.6	82.0
(ウ) 仲の良い友人が性別を男性から女性に変えたら抵抗がある	26.8	72.8
(エ) 仲の良い友人が性別を女性から男性に変えたら抵抗がある	23.8	75.9

※「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした

問 16 では、11 の項目について、不快になるかどうか、嫌悪感を覚えるかどうかを尋ねた。以下のような傾向が示された。「男性のような女性」に対する不快感より「女性のような男性」に対する不快感のほうが強い。また男性どうしの恋愛感情や性行為への不快感・抵抗感のほうが、女性どうしの場合よりも強い。

- 女性のような男性をみると、不快になる者の割合（10.6%） > 男性のような女性をみると、不快になる者の割合（5.3%）
- 街なかで男性どうしが手をつないでいるのをみたら、不快になる者の割合（12.0%） > 街なかで女性どうしが手をつないでいるのをみたら、不快になる者の割合（4.5%）
- 男性が男性に恋愛感情を抱くことに、嫌悪感を覚える者の割合（9.2%） > 女性が女性に恋愛感情を抱くことに、嫌悪感を覚える者の割合（5.8%）
- 男性どうしの性行為に、嫌悪感を覚える者の割合（28.1%） > 女性どうしの性行為に、嫌悪感を覚える者の割合（17.9%）

問 16 不快感・嫌悪感について



	賛成 (%)	不賛成 (%)
(ア) 女性のような男性をみると、不快になる	10.6	89.0
(イ) 男性のような女性をみると、不快になる	5.3	94.3
(ウ) 男性か女性かわからないような人をみると、不快になる	6.1	93.5
(エ) 街なかで男女が手をつないでいるのをみたら、不快になる	8.1	91.4
(オ) 街なかで男性どうしが手をつないでいるのをみたら、不快になる	12.0	87.6
(カ) 街なかで女性どうしが手をつないでいるのをみたら、不快になる	4.5	95.1
(キ) 男性が男性に恋愛感情を抱くことに、嫌悪感を覚える	9.2	90.5
(ク) 女性が女性に恋愛感情を抱くことに、嫌悪感を覚える	5.8	93.8
(ケ) 男性どうしの性行為に、嫌悪感を覚える	28.1	71.4
(コ) 女性どうしの性行為に、嫌悪感を覚える	17.9	81.6
(ク) 男性と女性の間の性行為に、嫌悪感を覚える	3.8	95.6

※「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合算して「賛成」、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合算して「不賛成」とした

抵抗感を尋ねる問 14 について、「抵抗がある」＝4 点、「どちらかといえば抵抗がある」＝3 点、「どちらかといえば抵抗はない」＝2 点、「抵抗はない」＝1 点として得点化し、「近所の人」「学校の同級生」「きょうだい」「自分の子ども」「仲の良い友人」が同性愛者だった場合に関する回答得点を合算した。同様に、抵抗感を尋ねる問 15 について、「そう思う」から「そう思わない」を 4 点から 1 点で得点化し、仲の良い友人が同性愛者だとわかった場合の回答得点を合算した。問 14 と問 15 のそれぞれの合算得点をさらに加算して、「同性愛者抵抗感尺度」を作成した。性別を変えた人に関する問 14 と問 15 の回答にも同様の処理を行ない、「性別を変える人への抵抗感尺度」を作成した。無回答は除外している。

問 16 については、「そう思う」から「そう思わない」を 4 点から 1 点で得点化し、男性と女性のあいだの性行為について尋ねた 2 項目を除き、「女性のような男性」「男性のような女性」「男性か女性かわからないような人」に関する不快感を尋ねる項目の回答得点を合算して、「トランスジェ

ンダー・ノンバイナリー不快感尺度」を作成した。また問 16 の項目のうち、男性どうし、女性どうしの恋愛感情や性行為に関する不快感・嫌悪感を尋ねる項目の回答得点を合算して、「同性愛者不快感・嫌悪感尺度」を作成した。無回答は除外している。

これら 4 つの抵抗感尺度ならびに不快感・嫌悪感尺度と、これまで検討してきた問 10・問 12 からの抜粋 6 項目の相関をみた。夫婦別姓は各尺度と逆相関し、同性カップルの子育ても各尺度と逆相関する。夫婦別姓が 6 項目に示す逆相関より、同性カップルの子育てが 6 項目に示す逆相関のほうが強い。つまり同性カップルの子育てに賛成する者の抵抗感や不快感・嫌悪感が弱い傾向にあると言える。一方、少子化対策としての結婚・出産の奨励と各尺度に相関があり、また身体における性別二元論と各尺度にも相関があった。問 10・問 12 からの抜粋 6 項目のなかで『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」が 4 つの尺度項目すべてにおいてもっとも強い相関があり、同性愛者不快感・嫌悪感尺度については 0.4 を越える。「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」については 0.2 を越える相関はない。

	同性愛者抵抗感尺度	性別を変える人への抵抗感尺度	トランスジェンダー・ノンバイナリー不快感尺度	同性愛者不快感・嫌悪感尺度
問10 (x) 少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ	.230**	.192**	.208**	.245**
問10 (y) 夫と妻は、名字(姓)を同じにする必要はなく、名字が違ってよい	-.233**	-.241**	-.142**	-.182**
問10 (z) 男性どうしや、女性どうしのカップルが、子どもを育ててもよい	-.321**	-.325**	-.248**	-.300**
問12 (a) 身体の性は、男と女の2つのみである	.266**	.259**	.228**	.302**
問12 (b) 性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる	.088**	.069**	.069**	.114**
問12 (c) 「男でも女でもない性」の人が増えると、社会秩序が乱れる	.354**	.356**	.376**	.408**

**p<0.01 *p<0.05

これら抵抗感尺度ならびに不快感・嫌悪感尺度と問 13 の制度や取り組みに関する意見について相関をみると、すべてが逆相関した。つまり性的マイノリティへの抵抗感、不快感、嫌悪感が強いほど、性的マイノリティに関する制度や取り組みに反対する傾向があると言える。問 13 であげた項目のうちもっとも強い相関があったのは 4 つの尺度すべてにおいて、同性婚制度である。

さらに 4 つの抵抗感尺度ならびに不快感・嫌悪感尺度と問 17 との相関をみたのが下表である。

	同性愛者抵抗感尺度	性別を変える人への抵抗感尺度	トランスジェンダー・ノンバイナリー不快感尺度	同性愛者不快感・嫌悪感尺度
問13 (7) 同性愛という性のあり方があることや、性別を変えたいと望む人のことを、義務教育で教えること	-.253**	-.237**	-.187**	-.247**
問13 (4) 同性カップル(女性どうし・男性どうしのカップル)が、法的に結婚できる制度	-.428**	-.398**	-.340**	-.421**
問13 (9) 親が育てられない子どもを、同性カップルが養子や里子として迎え、育てることのできる制度	-.356**	-.341**	-.311**	-.353**
問13 (x) 女性どうしのカップルが、生殖補助医療などによって、子どもをもてるようにする制度	-.328**	-.336**	-.293**	-.354**
問13 (z) 学校・職場・地域で、同性愛者や性別を変えた人も、差別なく公平に扱われるための法律・条例の整備	-.315**	-.290**	-.323**	-.318**
問13 (h) 学校・職場・地域における、多様な性のあり方についての啓発	-.270**	-.233**	-.261**	-.274**

**p<0.01

すべてに 0.4 ~ 0.7 の有意な相関があった。抵抗感尺度よりも不快感・嫌悪感尺度の相関のほうが強い。また問 17 の項目は、トランスジェンダー・ノンバイナリーに関する考えを尋ねているが、同性愛者不快感・嫌悪感尺度がもっとも強い相関を示した。

	同性愛者抵抗感尺度	性別を変えることへの抵抗感尺度	トランスジェンダー・ノンバイナリー不快感尺度	同性愛者不快感・嫌悪感尺度
問17(7) 「自分は、男性でも女性でもない」という認識をもつことには、賛同できない	.471**	.448**	.495**	.544**
問17(4) 「自分は、男性でもあり女性でもある」という認識をもつことには、賛同できない	.443**	.447**	.465**	.525**
問17(6) 性別を男性から女性に変えることには、賛同できない	.541**	.550**	.594**	.633**
問17(8) 性別を女性から男性に変えることには、賛同できない	.543**	.562**	.604**	.631**
問17(9) 性別適合手術（性転換手術）は、道徳的にまちがっている	.447**	.446**	.556**	.557**

**p<0.01

ここで、抵抗感と、回答者の学習経験および接触経験の関係について確認しておく。「同性愛者抵抗感尺度」と「性別を変える人への抵抗感尺度」のそれぞれの得点を3等分し、「低群」「中群」「高群」とカテゴリー化した。この変数と学習経験および接触経験をクロス集計したものが下に示す表である。

女性の人権について、同性愛・両性愛、性愛の多様性について、性同一性障害、トランスジェンダー、性別違和、性別の多様性について、いずれも学んだことがない回答者の抵抗感は、同性愛者に対しても、性別を変える人に対しても、すべて学んだ回答者の抵抗感より強い。

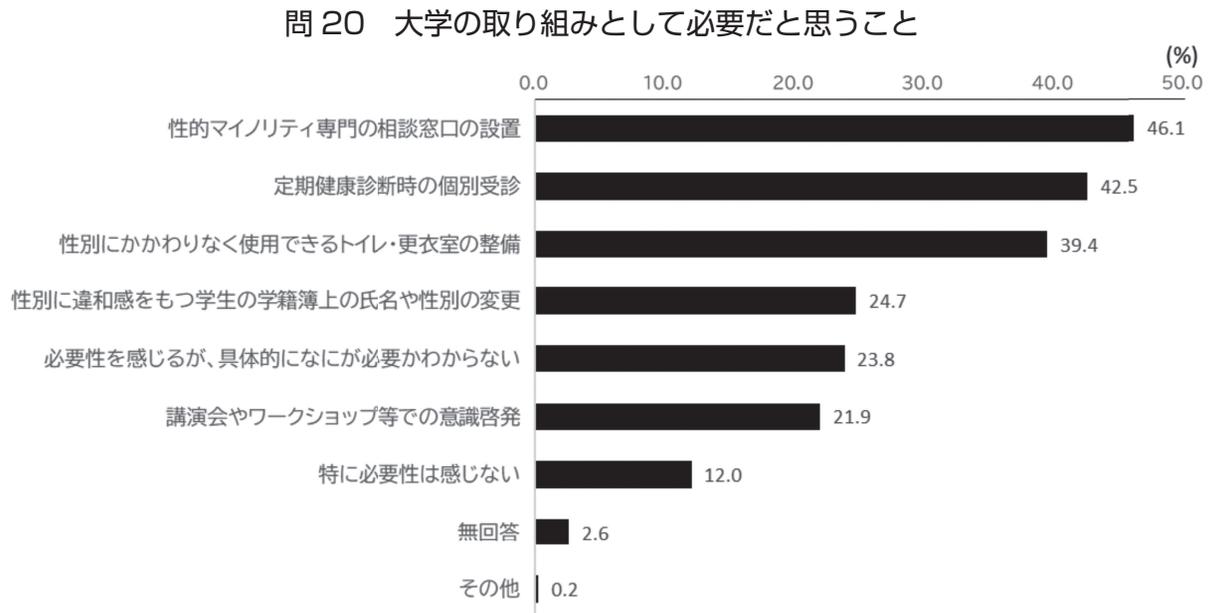
クラスメートや近しい友人、親せきや家族に同性愛者あるいは性別を変えた人・変えようと考えている人がいる人のほうがいない人よりも、同性愛者に対しても性別を変える人に対しても抵抗感は弱い。またカミングアウトをされた経験がある人のほうが経験のない人よりも、同性愛者に対しても性別を変える人に対しても抵抗感は弱い。周囲に性的マイノリティがいる者のうち、抵抗感尺度の高群に位置づく者は2割に満たない一方、身近に性的マイノリティがいない者の約4割が抵抗感尺度の高群に入っている。

	同性愛者抵抗感尺度				性別を変える人への抵抗感尺度			
	低群	中群	高群	合計(n)	低群	中群	高群	合計(n)
学習経験 いずれも学んでいない	30.2%	30.2%	39.7%	116	31.9%	30.2%	37.9%	116
いずれか学んだ	32.1%	33.5%	34.4%	343	33.0%	34.8%	32.2%	342
すべて学んだ	33.5%	37.0%	29.5%	1135	37.8%	32.6%	29.6%	1135
合計	32.9%	35.8%	31.3%	1594	36.3%	32.9%	30.8%	1593

		同性愛者抵抗感尺度				性別を変える人への抵抗感尺度			
		低群	中群	高群	合計(n)	低群	中群	高群	合計(n)
クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に同性愛者がいる	いる	47.2%	37.8%	15.0%	246	45.3%	37.1%	17.6%	245
	そうかもしれない人がいる	40.8%	33.3%	25.9%	147	44.2%	30.6%	25.2%	147
	いないと思う	32.9%	38.3%	28.8%	712	37.7%	32.6%	29.7%	711
	いない	23.6%	32.8%	43.6%	551	27.0%	32.8%	40.1%	551
	無回答	40.0%	20.0%	40.0%	5	40.0%	20.0%	40.0%	5
	合計	32.6%	35.9%	31.4%	1661	35.9%	33.2%	31.0%	1659
クラスメートや、近しい友人、親せきや家族に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいる	いる	37.9%	43.1%	19.0%	58	43.1%	39.7%	17.2%	58
	そうかもしれない人がいる	43.1%	41.7%	15.3%	72	48.6%	34.7%	16.7%	72
	いないと思う	39.4%	35.8%	24.8%	614	42.2%	33.3%	24.5%	612
	いない	26.9%	35.3%	37.8%	913	30.2%	32.6%	37.1%	913
	無回答	25.0%	0.0%	75.0%	4	25.0%	0.0%	75.0%	4
	合計	32.6%	35.9%	31.4%	1661	35.9%	33.2%	31.0%	1659
同性愛者・両性愛者である、あるいは性別を変えたい・性別に違和感をもっていると聞いたことを伝えられた（カミングアウトされた）ことがある	ある	47.4%	39.0%	13.6%	228	46.5%	37.7%	15.8%	228
	ない	30.2%	35.6%	34.2%	1413	34.1%	32.7%	33.2%	1411
	その他	41.2%	23.5%	35.3%	17	47.1%	11.8%	41.2%	17
	無回答	0.0%	33.3%	66.7%	3	0.0%	33.3%	66.7%	3
	合計	32.6%	35.9%	31.4%	1661	35.9%	33.2%	31.0%	1659

IV. 大学の取り組み

最後に、大学に関する設問の回答をみておく。問 20 では、性の多様性や性的マイノリティに関する大学の取り組みとして必要だと思うことを尋ねている（複数回答）。回答の多かった項目を上から順に並べたものが下図である。「性的マイノリティ専門の相談窓口の設置」（46.1%）、「定期健康診断時の個別受診」（42.5%）、「性別にかかわらず使用できるトイレ・更衣室の整備」（39.4%）とつづく。



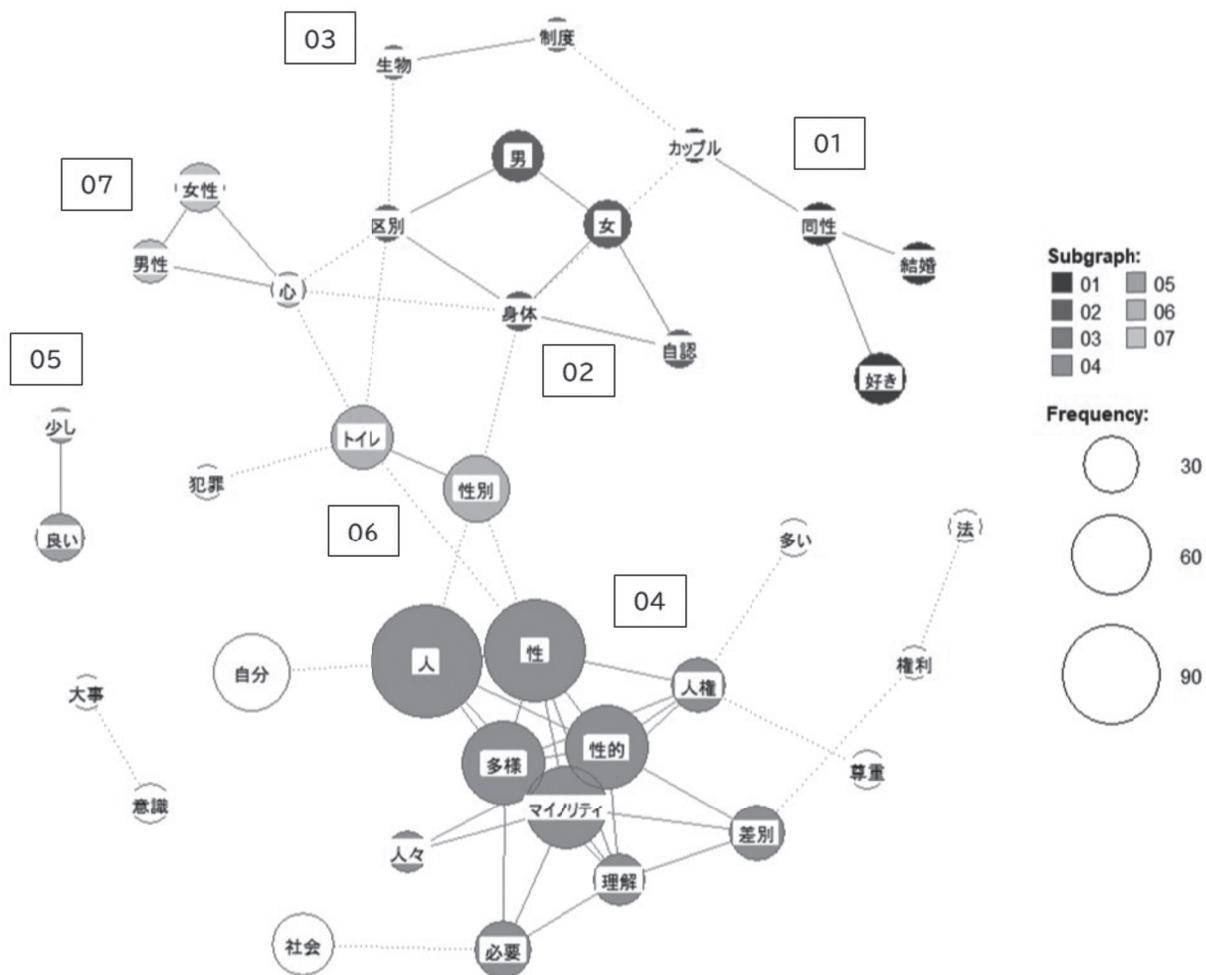
本調査票の最後に、本調査の内容、また性の多様性や性的マイノリティの人権について自由に記述できるよう欄を設けた。KH Coder を用いて作成した共起ネットワーク図が下図である。記述のあった 287 件のテキストデータのうち、出現回数の多い少ないが円の大きさを示される。またサブグラフ検出では、関連の深い語同士が太さの異なる線で結ばれることに加えて、色付けしてグループ分けされる。本稿ではサブグラフをグレースケールでグループ分けし、グループ番号を 01～07 で示した。

もっとも大きな円を示すグループ 04 には、「性」「性的」「マイノリティ」「多様」「人権」「差別」「理解」「必要」といった語がグループ化されている。次には、グループ 06 で「トイレ」に関する記述が多いことがわかる。テキストデータに戻って確認すると、トイレに関する記述は 37 件ある。トイレ、入浴施設、更衣室といった公共施設は性自認でなく身体の性別や出生時の性別に応じて区別されるべきといった意見、身の危険や性犯罪についての恐怖や不安に言及する意見が 37 件のほとんどを占めており、トランスジェンダー排除の言説との類似性を確認できる。性自認や性の多様性と犯罪を関連づけた意見もみられる。

グループ 04 に配置される「マイノリティ」「多様」「人権」「理解」といった語についてテキストデータに戻って確認すると、性的マイノリティの人権や性の多様性に対する理解と尊重を促進すべきという意見が多数ではあるものの、次のような意見が一定数あることに注意したい。性的マイノリティの人権尊重に慎重さを求める意見、理解の強制や過度な意識化を危惧する意見、マイノリ

ティに対する人権保障や優遇政策が秩序を乱したりマジョリティの人権を侵害したりすることにつながるという意見、多数派の安全・安心・便利さへの配慮を求める意見、マジョリティ側の多様性や人権の尊重への理解を求める意見である。LGBT 理解増進法の立案および制定過程において出された反対意見と共通している。またこれら意見には、性的マイノリティの人権保障や性の多様性尊重の重要性を理解しつつも、といった相反性の表現がされていることも特徴的である。

グループ01 にみられる「好き」の語についてテキストデータに戻って確認すると、誰を好きになるかは自由、人を好きになるのに性別は関係ない、好きになった人がたまたま同性だった、その人の好きにしたら良い、という意見がみられた。



V. おわりに

本稿では、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みについて、近畿大学の学生がどのような意識を有しているかを検討した。

まず、結婚、出産、子育てをめぐる制度や取り組みについての意識を確認した。夫婦別姓に対する賛成意見（66.4%）よりも、同性カップルの子育てに対する賛成意見（79.3%）のほうが割合は高い。それ以上に賛成意見の割合が高いのは同性婚制度であり、同性カップルが法的に結婚できる制度については89.6%が賛成している。同性どうしの結婚を法で認めることについて、伝統的な家族のありかたや生殖と関連させる否定的な意見は1割未満にとどまる。「愛し合っていればよ

い」「誰にも平等に、結婚する権利がある」といった意見が7割前後、「新しい家族のありかたにつながるのよい」「海外で認められているから、日本でもあってよい」といった意見が4割前後にのぼる。

同性カップルの子育てに賛成する者は、同性どうしの結婚制度、同性カップルに関わる子産み・子育て制度にも賛成する傾向にある。また学習経験のある者のほうが、少子化対策としての結婚・出産の奨励、夫婦別姓、同性カップルの子育てを支持している。さらに、まわりに性的マイノリティがいる者、性的マイノリティからカミングアウトされた経験のある者のほうが、夫婦別姓や同性カップルの子育てに賛成する。同性カップルの子育てに賛成している者は、トランスジェンダーやノンバイナリーの性のありようを否定する考えに反対する傾向がある。加えて、夫婦別姓や同性カップルの子育てに賛成している者のほうが同性愛者やトランスジェンダーに対する抵抗感、不快感、嫌悪感は弱い。

これら学生の意識には、同性婚やパートナーシップ制度をめぐる国内外の情報や動向を学生が肯定的に受け止めていることが影響していると考えられる。また「恋愛」や「結婚」においては、自由、平等、権利といった概念から議論することに違和感がないこと、異性、同性にかかわらず、結婚、出産、子育てに関する法整備を進めることへの理解があることが挙げられるだろう。「少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ」という考えに6割近くが賛成する回答結果にもつうじると読み解く。少子化対策としての結婚や出産を奨励する者のほうが同性愛者やトランスジェンダーに対する抵抗感、不快感、嫌悪感が強い傾向にある。性的マイノリティの結婚や出産を、性や家族の多様なありようとして保障するというより、少子化対策として推進すべきだと考えているとは言えないだろうか。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考えに賛同する者が7.8%という結果は、そうした性役割の実現可能性が低いという社会の現実に学生の意識が追いついてきているとみなすこともできる。現実認識が影響する学生の意識という視点に立ったうえで、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべき」という考えに賛成する回答（16.8%）のほうが夫婦の性役割に賛成する回答より高く、夫婦別姓に対する賛成意見は6割を越える、こうした結果をみたときに一つの問いが生まれる。「恋愛」や「結婚」における自由、平等、権利、および結婚、出産、子育てに関する法整備、これらへの理解があることは、性規範から学生たちが自由であることを意味するのではなく、性規範に即したかたちでの結婚や子育てを、同性、異性にかかわらず維持すべきだと考えている／維持しようとしているのではないか、という問いである。この問いをもって調査結果をみれば、「新しい家族のありかた」とは、異性の結婚、出産、子育てに変更を伴うことなく、同性のそれらを「同化」あるいは「追加」するものとして受容しよう、理解しようとする学生の意識がみえてくる。あるいは性規範に従った子育てや夫婦同姓が身近な現実であることに比べて、同性カップルの子育てがまだ身近な現実ではないことも、同性カップルの子育てに対する学生の寛容な意識に影響しているのかもしれない。

性規範に従った性表現については男性に対する抵抗のほうが女性に対するものより強く、男性同性愛者やトランスジェンダー女性に対する抵抗のほうが女性同性愛者やトランスジェンダー男性に対する抵抗より強い。性規範をめぐるインターセクショナルなアプローチに基づく教育実践を重視する必要があるだろう。

次に、同性婚や同性カップルの子産み・子育てなど結婚、出産、子育てをめぐる法制度の必要性を認める一方、差別を法律で禁止することについては意見がわかれることを確認した。「性的マイノリティには、十分な権利が保障されていない」という考えに7割が賛成する一方、「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考えに対する賛成は5割を超える。さらに「学校・職場・地域で、同性愛者や性別を変えた人も、差別なく公平に扱われるための法律・条令の整備」に9割が賛成する。この結果をどう読み解いたらよいだろうか。

「性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、暮らしにくい世の中になる」という考えについては多くの項目や尺度とのあいだに弱い相関しかみられなかった。したがって、差別禁止法に関する学生の意識を本調査から読み解くことは難しい。学習経験との関連についても明らかな結果が示されなかった。加えて、性的マイノリティがまわりにいる人のほうが、またケア関係が多い人のほうが、差別禁止法に否定的な考えをもっていることを確認した。

これら結果から、いくつか今後の課題をあげたい。一つに、性的マイノリティに対する平等な権利保障、性的マイノリティに対する非差別、性的マイノリティに対する公平な取扱い、こうした表現を掲げながらの法制度については賛成しながらも、「差別を法律で禁止する」といった表現には賛成しない者がいる理由を検討する必要がある。この検討には政治やメディアの影響も含む。人権擁護法案廃案からLGBT理解増進法成立に至るまで一貫して、大半の政治家と一部メディアは差別禁止法に消極的だった。消極的どころか否定的メッセージを発信しつづけた。その結果、国際社会の水準である包括的な差別禁止法も、なにか差別かを議論したり差別からの救済をはかったりする国内人権機関も、いまだ日本には存在しない。

本調査の回答者は、同性婚や同性カップルの子産み・子育てなど、結婚、出産、子育てをめぐる法制度の必要性を認めている。性的マイノリティには十分な権利が保障されていないと考えてもいる。さらに性的マイノリティがあらゆる領域で差別なく公平に扱われるための法律・条令の整備が必要だと考える。そうした学生が多数派であるという調査結果を踏まえながら、これら学生が問題だと認識し、必要だと理解する法制度を具体的に改善あるいは実現するためには、差別とはなにか、なぜ禁止されるべきなのか、法によって差別禁止を謳う理由はなにか、教育実践での継続的な議論が求められよう。

二つに、差別禁止法による影響について、学生が具体的に何を、なぜ不安や恐怖に思っているのか、その理由と背景を探究する必要がある。性的マイノリティに対する差別を法律で禁止すると、誰にとって暮らしにくい世の中になると考えているのか。それはなぜなのか。調査からは、性的マイノリティにとって暮らしにくい世の中になると考えているのではないかと推測できるような結果も示された。また性的マジョリティの立場からの差別禁止法に対する懸念について、自由記述欄に多くの意見が書き込まれている。LGBT差別禁止法でなくLGBT理解増進法となったこと、法運用にあたっては性的マジョリティの安心に留意し、政府はそのために必要な指針を策定する旨が盛り込まれたこと、これらに関わる議論と導入の経緯ならびに背景を踏まえながら、法運用が今後、「差別禁止」に関する学生の意識にどのような影響を及ぼすか、反差別や人権にかかわる教育実践のなかで吟味していく必要がある。

三つに、人権の視点からの制度議論はまさに人権教育実践であるという視点を改めて確認する必要がある。政治家による差別発言などの直接的な言動に対応できる差別禁止法が求められる。それ

は、差別に向き合う私たちの姿勢を問うものである。かわいそうな一部の人への思いやり、配慮、理解でなく、構造という視点をもち規範を問い直すような差別禁止法が求められる。

最後に、「身体の性は、男と女の2つのみである」という考えと、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」といった考えについて確認したい。これら2つの考えは、多くの項目や尺度に強い相関があることから、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みに関する学生の意識を把握するうえで重要であることがわかる。

たとえば学習経験のない者のほうが、また性的マイノリティがまわりにいない者のほうが、これら考えを支持する傾向が示された。この2つの考えに賛成する者のほうが、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みに賛成していない。さらに身体の性別二元論や社会秩序を重視する者のほうがトランスジェンダーやノンバイナリーの性のありように反対する傾向がある。「身体の性は、男と女の2つのみである」という考えと、「『男でも女でもない性』の人が増えると、社会秩序が乱れる」といった考えに賛同する者のほうが、同性愛者やトランスジェンダーに対する抵抗感、不快感、嫌悪感が強い傾向にあることも確認できる。

暴力を自分が受けていたり見聞きしたりした経験がある人、ケア関係が少ない人のほうがこれら考えを支持していることから、暴力やケアといったテーマや実態と関連させながらの教育実践も欠かせない。

性的マイノリティへの抵抗感、不安感、嫌悪感が強いほど、性的マイノリティをめぐる制度や取り組みに反対する傾向があり、そのなかでも同性婚制度への反対が強い。また同性愛者に対する不快感や嫌悪感が強い者ほどトランスジェンダー・ノンバイナリーの性のありように賛成していない。「性的マイノリティ」が一括化して理解されている可能性も指摘できる。

身体の性別二元論を学生が強調する理由として、トランスジェンダーを排除する言説と身体の性を重視する言説が影響していることが考えられる。それは公共空間における社会秩序を重視しようとする主張ともつながる。同性婚制度もまた同様に、社会秩序の重視を主張する側からの標的にされている。

性的マイノリティに対する抵抗感、不快感、嫌悪感が、身体の性を重視したり、社会秩序を重視したりする言説をもってトランスジェンダー排除や同性婚制度への反対という反動につながる。そうした学生の意識を本調査結果は示唆する。同性カップルの子産み・子育てをめぐる法制度についても、その存在と実態が可視化されれば、支持は反発へと転じる可能性がある。学習経験と接触経験が抵抗感を弱めていることを本調査から確認できた。法制度、教育、そして具体的な出会いが、これら反動への抵抗となるであろう。